

## 94 聖マタイの召命

カラヴァッジョの大失敗

2019・2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》1599-1600 カラヴァッジョ

カラヴァッジョの《聖マタイの召命》は、成功作なのか、失敗作なのか、について2019年にWeb上で論考した。\*《眼鏡の聖マタイ・2013・真鍋友範》  
ここでの結論は、成功作でもあり、失敗作でもある、という結論であった。

成功とみられる点は、無事社会デビューに成功した点だろう。  
逆に失敗した点は、絵の内容が高度すぎ、正しい理解を得られなかった点だった。

更に、この失敗部分の追加事項が、今回一点明らかになった。

1 カラヴァッジョは、この絵の見られる角度を計算しなかった  
バロック絵画を開拓したカラヴァッジョは、素晴らしい功績を後世に残した画家であるが、一点だけレオナルド・ダ・ヴィンチを越えられなかった点がある。

それは、描いた絵が正面から見られるのではなく、【左手斜め下から見上げるように鑑賞されることを予見して絵画を描けなかった点】だ。

つまり、いわゆるアナモルフォシスの誤作動を考慮していないのだ。

《聖マタイの召命》は、真正面から鑑賞して、初めて正確に内容が理解できる絵画作品であったが、左斜め下から見ることで、誤った情報を観衆に与えているのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチが、特定の位置からの視線で作品を見ることを意識して、《受胎告知》で行った高度な描写技術を、残念ながら、カラヴァッジョは採用できなかったのだ。

コンタレリ礼拝堂での左下側からの観衆視点を意識していない。

このことは、カラヴァッジョの大失敗だ。

見る角度の変化で一体どうなるのか。

絵画内容を正確に理解することを妨げることに繋がるのだ。

具体的には、

- ① 背をこちらに向けて座る納税者グループの若者の腰の剣が作る視線誘導補助線が、より急角度に見える。これは、眼鏡の収税人ではなく、髭の男へと、視線が誘導されてしまう。
- ② 手前の俯いた若者は、収税人ではあるが、あまり深い意味はない人物だが、必要以上に大きく見え、呼ばれた人物ではないか、との誤解を与える。
- ③ イエスの右手以外の重要な左手の動作や、右足を左側に踏み出した足元がほぼ見えない。このことが、イエスは指差しているという誤解につながる。



A

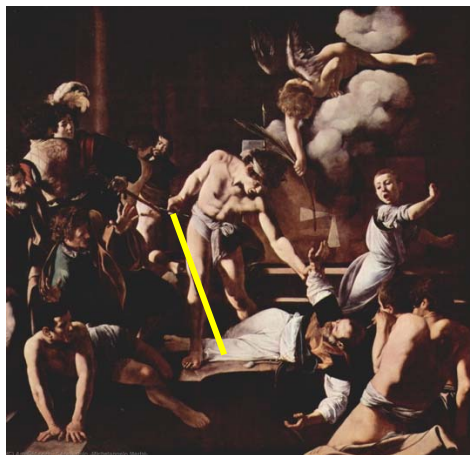


B

お分かりでしょうか。両者A・Bを比べると、剣の軸線角度のズレが生じている。些細な違いどころで済まない重要な問題が発生している。

カラヴァッジョは、対面に掲示されている《聖マタイの殉教》との連作としての描画効果をあげる為に、【剣】を利用している。

《聖マタイの召命》では、【剣】の軸線上方にマタイがいる。逆に《聖マタイの殉教》では、【剣の】下方に殺害されるマタイを配している。(下図)



つまり、【剣】の軸線は、聖マタイの居場所を示唆する重要なアイテムであり、ヒントであったのに、その意図が活かされていないのだ。

Bでは、約45度の上向き剣軸線が、眼鏡の収税人（＝聖マタイ）に向かっているのが、Aでは、約80度の剣軸線が髭男に向かっている。

軸線には、視線誘導補助線という、重要な絵画構成要素が存在する。この軸線の方向が異なることで、誤った情報を鑑賞者に与える結果になるのだ。

カラヴァッジョは、この誤認対策までは構想できなかったのだ。

その結果、ローマ・カトリック教会は、同様に誤った認識のドイツ学派美術史家とともに、この誤認識要素にも気づかず、世界に誤情報を拡散し続けている。（2024現在）